

発達障害のある高校生を対象としたオープンカレッジ 就労準備支援プログラムの実践

薬師寺明子 河本茂美 今出大輔 柴崎晃司 岩田直也 濱口美穂
(おかやま発達障害者支援センター)

1. 背景及び目的

近年、発達障害のある人への支援について多くの課題があり、社会的にも注目されている。特に知的障害を伴わない発達障害のある人は、利用できる福祉サービス等が少なく、高等学校、専門学校、大学等を卒業後は就労という進路が中心になってくる。そのため、今後求められる支援体制の1つとして、「就労準備に取り組む場」が求められている。

おかやま発達障害者支援センター県北支所(以下;支援センター)においても、普通高校等に在籍する生徒からの就労相談が、多く寄せられている。しかし、職場体験の機会が少なく、就労イメージを持ちにくい現状があり、就労準備のための資源が求められている。この現状の課題解決にむけて、支援センターから美作大学へ協力の提案があった。

大学の施設、教員・学生等の大学資源を活用し、学習の機会の少ない障害者を大学に招き、生涯学習を支援するオープンカレッジという取り組みがある¹⁾。知的障害者を対象としたオープンカレッジは多くの大学で実践されているが、発達障害のある人を対象としたものは少ない。

そこで、両機関が協働し、発達障害のある人を対象としたオープンカレッジを企画・実施した。なお、平成25年度は試行的な実施、実践報告として地域生活科学研究所を主催とするシンポジウムを実施することで、地域に活動を公開し、平成26年度より本格的な実施となった。平成27年度より、地域生活科学研究所からの助成を得て、実施している。

2. 方法

支援センターと美作大学が協働し、岡山県北地域における発達障害者に対する社会的な支援と

して、健康料理教室を開催し、その教室の参加者に支援プログラムを行う。

1) 企画：筆者及び支援センタースタッフ

2) 実践者：

①全体の運営：筆者及び支援センタースタッフ

②参加者へのサポーター及びスタッフ：美作大学社会福祉学科薬師寺研究室ゼミ生(3年生・4年生)。

③講義の際の講師：看護師資格を持つ大学教員、キャリアコンサルタント資格を持つ大学職員

④模擬作業：大学附属図書館職員

3) 対象：普通高校に通う発達障害のある人で、就労にむけた準備に意欲があり、学校に安定して通うことができている状態にある人。定員8名。参加にあたっては、所属校の担任、特別支援教育コーディネーター、相談室の教諭が、参加者・保護者と相談の上、申し込む形式をとった。また、①参加者・保護者にプログラム概要の説明、②保護者や所属校の担任等から参加者の配慮点の聞き取り、③参加者同士のグルーピングの検討、④参加者と学生サポーターのマッチング等を目的に、支援センターが所属校への事前訪問を実施した。

3) 倫理的配慮：プログラムの評価研究に関する参加者への同意および個人情報の記載等については、事前訪問時に参加者に説明を行い、書面にて同意を得た。

3. 実践内容

1) プログラム実施前：支援センターが参加者の所属校に事前訪

問を行い、得られた配慮点等の情報をもとに運営スタッフ全員で企画会議にて共有した。

2) プログラム期間：1クール2日間とし、土曜日を利用し、1回5時間程度であった(表1)。

表1 当日のスケジュール

1日目	2日目
オリエンテーション(15分)	
講義Ⅰ(45分) (アンケート記入含む)	講義Ⅱ(45分) (アンケート記入含む)
休憩(10分)	休憩(10分)
マナー講座Ⅰ(20分)	マナー講座Ⅱ(20分)
グループワーク(30分) (アンケート記入含む)	グループワーク(30分) (アンケート記入含む)
昼休憩(60分)	昼休憩(60分)
模擬作業Ⅰ(90分) (1日目と2日目でグループを入れ替える)	模擬作業Ⅱ(90分) (1日目と2日目でグループを入れ替える)
グループワーク(30分) (アンケート記入含む)	グループワーク(30分) (アンケート記入含む)
	全体の振り返り(15分) (アンケート記入含む) 修了証書授与

3) プログラム内容：「働くことを知る・学ぶ」をテーマとして、①講義、②マナー講座、③模擬作業を実施した(図1)。それぞれの内容を振り返るため、実施直後にアンケート記入し、それらをもとにグループワークを実施した。プログラム終了後は、当日参加したスタッフで事後ミーティングを実施した。

4) 参加者及び支援者の動き：参加者の定員は8名、グループワークと模擬作業は2グループ(4名ずつ)に分かれて実施した。なお、グループ分けは参加者の個性を配慮した。支援者として、学生が個別に「学生サポーター」として、2日間のプログラム全体を通して参加者が困った時や分からない時のサポート役を担った。学生スタッフは実施中の準備や片づけ、模擬作業の際の見守り等を行った。

	内容と役割分担	
講義	講義Ⅰ 「働く上で大切なコミュニケーション」 (キャリアコンサルタント資格を持つ大学職員が担当) ①学校と職場の違い ②挨拶について ③報告・連絡・相談(ホウレンソウ)について	講義Ⅱ 「基本的な生活習慣の大切さ」 (看護師資格を持つ大学教員が担当) ①学校と職場の違い ②朝ご飯を食べること ③睡眠時間の確保 ④朝の準備や段取り ⑤身だしなみを整える
マナー講座	マナー講座Ⅰ (社会福祉学科の学生が担当) ①挨拶と報告をする時は ②作業中の指示 ③質問をするタイミング	マナー講座Ⅱ (社会福祉学科の学生が担当) ④寝る前の過ごし方 ⑤出勤の際に ⑥身だしなみの整え方
模擬作業	模擬作業Ⅰ 「図書館作業」 (附属図書館職員が担当) ①抜き取り作業 ②返却作業	模擬作業Ⅱ 「事務作業(実習日誌作成)」 (支援センター職員が担当) ①ラベル印刷 ②ラベル貼り ③用紙のどじ込み

図1 プログラムの内容と役割分担

5) プログラム実施後：支援センターが参加者の所属校を訪問(事後訪問)し、保護者、担任、特別支援教育コーディネータ

一、相談室教諭等に可能な範囲で同席してもらい、参加者にプログラムの感想等を聞き取った。また、プログラムを通して得られた今後の就労準備に関して、家庭生活や学校生活（学外実習等）で取り組みそうな点について提案した。後日、総括としてスタッフ（学生除く）で反省会を実施した。

4. 実践の具体的な内容

1) 講義：職場で働くうえで必要となる知識に関する講義を2つのテーマで実施した。パワーポイントを用いて各講義は約30分程度。

①「働く上で大切なコミュニケーション」：学校と職場の違いを整理すると共に、挨拶について、報告・連絡・相談（ホウレンソウ）の大切さについての講義を行った。講師はキャリアコンサルタント資格を持つ大学職員。

②「基本的生活習慣の大切さ」：学校と職場の違いを整理すると共に、朝食の必要性、睡眠時間の確保、朝の準備や段取り、身だしなみについて講義を行った。講師は看護師資格を持つ大学教員。



写真1 講義

2) マナー講座：講義内容をより具体的な場面で示すため、学生が軽演劇を行う。一つの講義に対して各3つの場面で構成している。一つの場面を見終えた直後に、そのテーマについてワークシートを用いて整理した。

①マナー講座Ⅰ：「働く上で大切なコミュニケーション」の講義内容に連動して、テーマは、「挨拶と報告をする時のやりとり」、「作業中の指示の受け止め」、「質問をするタイミング」の軽演劇を行った。

②マナー講座Ⅱ：「基本的生活習慣の大切さ」の講義内容に連動して、テーマは「寝る前の過ごし方」、「出勤前の準備の大切さ」、「身だしなみの大切さ」の軽演劇を行った。



写真2 マナー講座

3) グループワーク：支援センター職員がファシリテーター役となり、2グループに分かれて行った。参加者と学生サポーター

が並んで座り、発言に困った時等に支援を行った。内容は、講義やマナー講座での参加者の学びや気づきを取り上げ、参加者同士で共有した。

4) 模擬作業：講義とマナー講座で得た知識、グループワークを通して押さえたポイントを実践するために、図書館作業と事務作業の2つの作業体験を実施した。

①図書館作業：大学附属図書館を会場とし、指示書に従って、本棚から書籍を取り出してくる「抜き取り作業」と、請求番号等を元に書籍を本棚に戻す「返却作業」を実施した。

②事務作業：講義をした会場を作業場のようにレイアウトした。事務作業は3つの工程から構成されており指示書に従って行う。同大学から発送する書類を順番通りに取って「セット」する。セットされたものを封筒に入れる「封入作業」、封入した封筒に宛名ラベルを貼る「ラベル貼り」を実施した。

この模擬作業にあたっては、参加者が自立的に作業ができるよう、作業の手順書や、学生スタッフの実演、見本（完成品）、困った時に質問できる学生サポーター等を活用してもらいながら実施した。



写真3 図書館作業（返却作業）



写真4 図書館作業（報告）



写真5 事務作業

5) グループワーク：模擬作業実施後に学生サポーターから参加者が意識して取り組んでいた点や頑張っていた点を報告してもらい、参加者が作業をするうえで役立ったと感じたツールや

環境を振り返ることで、自分に合ったサポートを知る手がかりとした。また、参加者が気づいていないことについても学生サポーターやファシリテーターからの意見で理解できるようにした。そして、最後に講義等を含めた1日の振り返り、2日目には2日間のプログラムを終えての感想等についても共有した。学生サポーターも頑張っていた時の様子等について参加者に伝えた。



写真6 グループワーク

6) 修了式：2日間のプログラムを終えて、学生サポーターから担当している参加者へ修了証書を手渡した。その後、参加者から感想や学生サポーターへのお礼等の言葉と学生サポーターから頑張っていたこと等についての言葉を贈った。

5. 結果

1) 実践内容

①第1クール 実施日：6月11日（土）18日（土）

参加者：8名

②第2クール 実施日：9月24日（土）10月1日（土）

参加者：7名

2) 参加者

講義やマナー講座を通して参加者からは、「報告・連絡・相談は、どのようなタイミングで、どのような言葉で伝えれば良いかが具体的に分かった」、「身だしなみは出来ているが、睡眠時間の確保や朝の準備が出来ていないので、気を付けたいです」、「先生に言われてきたことは、“命令”や“注意”ではなく、自分のためを思って言っている“助言”だったことに初めて気付いた」等の感想がアンケートに記載されていた。参加者にとって、新たな知識の習得や具体的な使い方を学ぶ機会となっただけでなく、自分が今後整えていくべきことへの気付きや、相手の立場に気付く機会にもつながった。

事後訪問時の参加者の聞き取りからは、「これまで“質問”が苦手であったが、模擬作業で“質問”の練習をしたことで、学校でも先生に質問をすることが出来た」との意見もあった。本プログラムは、講義やマナー講座で知識の学びや気付きを得てもらい、その直後に模擬作業の中で実践を行い、最後にそれらを振り返ることで自己理解につなげる、「学び—実践—振り返り」をねらった構成を取っている。この過程を通して、参加者の気付きにつながり、日常生活における般化にもつながっていたと考える。また、「自分は将来仕事なんて出来ないと思っていたが、やるべきことをきちんと教えてもらうことで、スムーズに作業が出来て良かった」という参加者の感想からは、本プログラムが、成功体験を通して、就労イメージの拡大や自分にとって必要なサポートや環境を知る手がかりにもなり、今後の就労準備を考えるきっかけになったと思われる。

3) 所属校

所属校の特別支援教育コーディネーターや相談室教諭等、学校内における発達障害のある生徒への支援を中心的に担うキ

ーパーソンと事前訪問、事後訪問、プログラムの見学等を通して関わることで、学校内のニーズの掘り起こしにつながったり、発達障害のある生徒に対する就労準備の必要性や、就労準備に大切な視点を共有できた。実際に、所属校の教諭からは、発達障害のある生徒に対して、通常のキャリア教育以外にどういったポイントを伝えていく必要があるのか、発達障害のある学生が理解しやすい伝え方（学び—実践—振り返りの過程）を学ぶことが出来たとの意見が聞かれた。

3) 学生

障害者福祉分野での就労を目指す学生にとっては、発達障害のある人との関わりを実際に体験できる機会、発達障害の特性理解や対応方法を実際に学ぶ機会になった。特にサポーターを担った学生からは、「実際に発達障害のある人と関わる中で、参加者自身に合ったサポートや環境を整えることで力を発揮していく姿を見ることが出来た」、「大学の講義等で得た知識をどのように実践に活かしていくかの体験となった」、「将来（就労）への見通しを持ちながら今必要とされること（学ぶべきこと）は何かを考える視点を学べた」等の意見が出た。

4) まとめ

本プログラムは、普通高校に通う発達障害のある人の就労準備に取り組む資源創出に留まらず、所属校における発達障害ニーズの掘り起こしや就労準備の視点の共有にまで効果が及んだ。また、人材育成機関である大学が、支援センターと協働することで、大学側の強み（教職員の専門性、地域に密着した学内施設の利用、学生の参加）を活かし、地域における発達障害ニーズに応じたプログラムを実施することができ、地域貢献の機会にもつながったと考える。

6. 今後の展開

平成25年度から4年間で東北エリアの一般の高等学校に在籍している高校生を対象に実施してきた。地域の6つの高等学校から32名の参加者が本プログラムを体験した。このプログラムに参加後の高校生活、進路選択に関して一定の効果があったと考える。しかし、参加者はこのプログラムを必要としている高校生の一部であり、顕在的、潜在的に多くの高校生に対して実施していくことが必要であると考え。現在は大学と支援センターが主体となって実施しているが、今後は一般高校単位で就労準備教育を実施していけることが望まれる。

こうした背景から平成27年度より大学、支援センター、参加している高等学校の教育相談担当や進路指導担当教員等の三者で今後の企画会議を実施している。その結果として、平成27年度は、次年度に向け「参加する高校生が所属している高校教員の見学参加を増やし、プログラム内容を理解するとともに、高校での就労準備教育につなげられるようにする」という目標となった。その結果、第1クールはA高校3名、B高校1名、C高校2名の見学参加があり、第2クールはA高校2名、C高校3名の見学参加があった。また、平成28年度は、次年度に向け「一般高校に在籍する発達障害のある生徒の個別ニーズに応じて、高校単位で就労準備教育を実施するための後押しを考える」という目標を得られた。

今後このプログラムを実践していくとともに、必要としている高校生に就労準備教育として高等学校教育に活用できるように、内容を吟味し働きかけていくことを続けていきたい。

（文献）

1) 建部久美子(編)・安原佳子(2001)：知的障害者と生涯教育の保障—オープン・カレッジの成立と展開—。明石書店。